

ふくりゅう

発行所 日本下水道文化研究会運営委員会
 発行責任者 酒井 彰(運営委員会副代表)
 発行年月日 平成 11 年 6 月 20 日
 印刷所 (株)愛 甲 社
 編集 小松建司 高橋敬一 斉藤由勝
 春夏合併号(通巻16号)

NPO 法人設立総会を終わって

酒井 彰

今回は、5月22日行われた総会及び高月先生の講演会の報告、そして総会後の運営委員会で決まった新役員の担当について報告いたします。

1. 特定非営利活動法人設立総会

快晴の5月22日、本郷学士会館でNPO法人格の認証申請のための手続きとして必要なNPO法人設立総会を開催いたしました。日本下水道文化研究会にとっては、3回目の総会にあたります。手続き上必要なひとつの過程ということは確かですが、やはり、本会の新たな展開について、会員の総意を得るといふ大きな目的があったと思います。その意味では、正直申しまして出席者30数名というのはややさびしいというのが実感でした。季節がよすぎたのかもしれない。

ともかくも、議長に稲場代表を選任し、10の議案の説明が進められていきました。とくに異論もなく、議事はスムーズに進行し、すべての議案が拍手多数で認められました。行き届いた準備と評価していただけたのだとすれはうれしいことですが、一抹のさびしさも感じないわけではありませんでした。今回の総会は、いわば土台づくりの承認ということですから、その土台の上に何を築いていくかに多くの会員の関心はあるのだと思います。



さて、本会もNPO法人格をもって活動していくことで、会員の合意も得られたこととなります。

で、6月3日、照井委員に東京都生活文化局への申請手続きをしていただきました。総会から少し時間がたったのは、定款の一部の語句が不確かだという指摘を受けたためです。申請から約4ヶ月後、10月はじめにはNPO法人として認証されることになると思います。

2. 高月先生講演

総会終了後、京都大学高月紘先生から、「ライフスタイルと環境負荷」と題して講演をいただきました。市民編集版の廃棄物学会誌を発行したり、ご存知の方も多いたと思いますが、“High Moon”のペンネームで漫画を通して



ごみ問題に警鐘をならされておられ、廃棄物の分野で“市民派”として著名な先生です。今や、先生の講演を聴けるのは稀なチャンスであったということが言えます。せっかくのチャンスをのがされた会員が本当に多数おられたことは残念に思います。豊富な写真、ご自身で描かれた漫画、そして学術的な研究成果を交えた1時間の講演は、我々に自分たちの今の生活が環境にどれほどのインパクトを与えているのかということを確認させるとともに、今の生活は、環境へ与えるインパクトが大きい割に本当に必要なことなのかを再考しなければならないことがたくさんあることを教えられました。そして、ライフスタイルを変えずして持続する将来を描くことは難しいことを確認させられました。

当日参加できなかった会員が少なくなかったので、少し長くなりますがもう少し続けたいと思います。下水とごみとどう違うのだろうかということをごまごま考えます。一方が、リサイクルからごみそのものを減らそうと動きが活発なのに、下水道の方では上流をコントロールしようという動きがほとんどないのはなぜなのでしょう。下

水道ではそんなことを考える必要がないのでしょうか。会員の皆様に確認いただいた設立趣旨書にもあるようにそんなことは決してないはずで、下水道でそんなアクションを起こしていくために、高月先生の講演は貴重なものでした。

3. 新しい役員の方について

総会後、学士会館ガーデンにて、総会がとどろきなく終了したということで生ビールで乾杯させてもらいました。その後、同じ席で運営委員会を開き、新しい担当を以下のように決めました。なお、稲場前代表、谷口、栗田、照井の各運営委員には、本会設立より運営委員をお願いしており、今後も多面的に指導を仰がなければならないということで、とくに担当を決めず、広くこれまでの運営を通しての経験をふまえた指導ならびに経験を伝授していただきたいと考えております。

代表	酒井彰
副代表	木村淳弘
会計	佐野廣一
事業	古畑義正、桂川雅信
広報・機関誌編集	小松建司、斎藤由勝
会員管理	山出康洋
研究	石井明男
書記	新澤紀昭

もうお気づきのように代表が代わりました。ここで、代表交代の経緯を少しお話させていただくとともに、この場をお借りして、ひとことご挨拶させていただきます。稲場前代表が代表を降りられるというお話は、NPO 法人格取得の作業が本格化したころからおっしゃっておられましたが、この転機には強力なリーダーシップがなければ糸の切れた凧のようになってしまうと、慰留に努めてきました。ですが、ご意志は固く、この日の運営委員会で「新しい革袋には新しい酒を」とおっしゃられ、運営委員会委員長としても1年に過ぎない私を推薦していただきました。まことに浅学で、「下水文化」を十分語ることもできませんが、先に述べましたように、設立当初からの4名の“下

水文化の中心人物”にも引き続き運営委員として残っていただくということで、お引き受けすることといたしました。

稲場前代表は、本会の設立からの中心を担っていただき、会をここまで引っ張ってきていただきました。稲場先生なしには、存在し得ない会といっても過言ではありません。感謝の意を表すとともに、今後とも、ご指導以上のことをお頼みするやもしれませんが、よろしくお願い申し上げたいと思います。

この1年間、谷口運営委員に代わり、運営委員長を引き受けてまいりましたが、これまでは、かなり具体的に決められた計画を実行していけばいい面がございました。そういう意味では、無難にやらせていただけたということがあるかもしれませんが、もちろん、運営委員の方々及び会員のご協力あってのことです。そのなかで、自分に何が欠け、指導や協力を仰がねばならない点もわかってまいりました。

当然、「特定非営利活動法人・日本下水文化研究会」となったからといって、これまでの活動の方向性を変えることはありません。ただし、組織としての持続性、NPO 法人としての新たな活動展開を考えたときには、決して問題がなくはないことも認識しております。とくに、今回 NPO 法人格を取得するという事は、定款に示された本会の目的にそって、より多くの会員各位が情報の発信者となり、自発的に活動に参加していただくことを意味するものと思いますが、そのための環境づくりということを考えていかなければならないと思っています。これが、新しい革袋に入った新しい酒の、少し長期的課題になるとは思いますが、目標としていきたいと思っています。

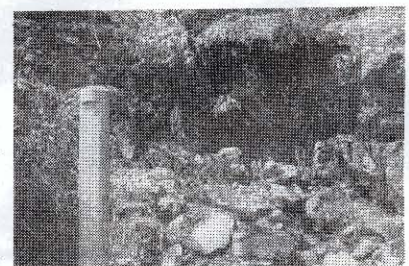
これからは、事務所も設けられますし、毎年の総会も開催されます。会員の皆様には、運営委員会に対しまして、是非とも忌憚のないご意見を寄せいただきますとともに、大いに活動に参画していただきますようお願い申し上げます。

多摩源流祭に参加して

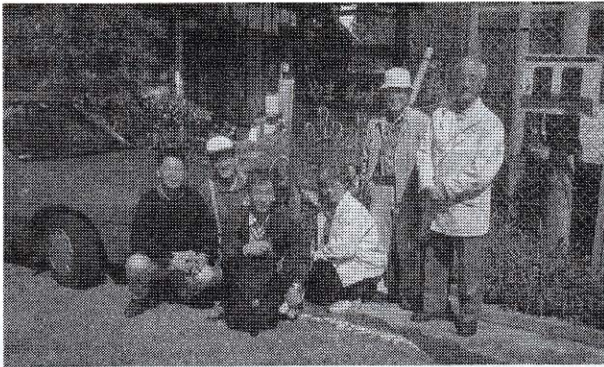
日水コン海外本部 齋藤博康

去る5月4日(月)、連休も終わりに近づいた祝日、下水文化研究会のメンバー6人は山梨県小菅村の第15回多摩源流祭に参加した。研究会は4日の源流祭に参加した後、小菅村に一泊し、翌5日(子どもの日)は多摩川の水源地、笠取山(標高1,958m)の水干(みずひ)を訪ねる計画を立て、参加者を募集した。4日の朝、指定されたJR八王子駅に集合したのは、藤森さん、谷口さん、酒井さん、山出さん、われわれ夫妻だった。

折から降出した雨のため、中央道の上野原ICからの山越えは途中休憩も取らず、景色を楽しむこともできず、小菅村の山水館に繰込んだ。運



水干



山水館にて

転は藤森さんにご苦勞を願った。山水館は、松木浩二さんが経営する旅館で、氏は元都水道局長松木喜久郎さんの甥ごさん。雨中、玄関へ飛び込むと、当の松木さんが祭りに参加するため来ておられた。松木さんは小菅村の出身、名誉村民で、源流祭には欠かせない人だ。村は面積53km²のうち、94%が山林で、主産物は林業と農産物。山間に約1,200人が住むが、下水普及率は100%である。

源流祭は、小菅川の横、小学校の校庭を会場にして折からの強雨にも拘わらず、カラフルな傘を上げた大勢の参加者が見守る中、踊りや歌が行われ、地元の物産展も行われ盛会だった。夜、暗くなって小菅川の河原で恒例のお松焼きと花火大会が行われた。お松焼きは、高さ10メートル程に積み上げたピラミッド型の松材を中にして、両脇に少し低い同様の松材を積み上げ、その三つのピラミッドに山伏に扮した地元の数人が順次、火を放ち、三つの火

が天を焦がして燃え上がる壮大な行事である。火力が強かったので、河原の見物人は熱くて場所を移動した程。燃えさかる火は川面に美しく映え、舞上がる火の粉は幻想的だった。続いて打上げられた大きな花火は四方が山に囲まれ反響するので、煙と音と光の迫力は凄まじいかった。観衆は水と火の美しいコントラストにしばし、感銘。谷口さんは何度も来たが、雨に降られたのは始めてで、しかし、一番印象に残ったといった。

翌日は、前夜の雨が嘘のようによく晴れ上がり、山は緑一色、快晴の登山日和になった。藤森さんの運転で、落合部落を経由、登山口手前で車を降り、鳥のさえずりを聞き、野草を眺め、ゆっくり山道を歩いた。溪流にキラキラ光る砂金を指さし、本物だと教えてくれたのは山出さん。この辺りは東京都が管理する水源林で、ハイカーのために登山道は良く整備され、看板、標識もセンスの良いイラスト入り説明文とに代わっていた。ゴールデンウィークだから登山者の混雑が心配されたが、前日の大雨のせいかなど人に会わなかった。全員無事に水干に到着、滴り落ちる原水のしずくを両手に受けて飲み、味わい、水の有難さを感謝した。東京湾の河口まで138キロメートルの多摩川はここから始まる。思わず、しっかり足もとを踏みしめた。登るのは苦勞だったが、下山はスピードも出て快調。全員、快い疲労と満足感で無事に山を下った。そして、来年、また来よう約束した。

源流祭は水に感謝し、自然に触れ合う良い機会である。他の会員の皆様もぜひ参加して頂きたい。

バルトン先生とシャーロック・ホームズ

シャーロック・ホームズとバルトン先生、「どうい関係?」と、どなたも不思議に思われることでしょう。実は、バルトン先生はシャーロック・ホームズと、いえいえシャーロック・ホームズの作者アーサー・コナン・ドイルと親友だったのです。

時は1860年代、場所はスコットランドのエディンバラ、歴史作家J.H.バートンの長男ウィリアム・K.バルトンと3才年下のコナン・ドイルは、バートン家がドイル家を物心両面から援助しておられたことから、兄弟のように仲良く幼少年時代を過ごしました。

やがてドイルは医師に、バルトンは衛生工学技術者になりましたが、ドイルの短編小説にバルトンが実名で登場したり、来日後のバルトンが英国の写真雑誌に連載していた評論記事の原稿料をドイルが送金したりと、二人の友情は終生変わることなく続きました。

このすてきな情報をもたらして下さった、コナン・ドイル



若きW・K・バルトン

研究家の石井貴志さんによりますと、バルトン先生が急逝されなければ、コナン・ドイル先生は日本に来られる予定だったそうで、そうなっていたら「シャーロック・ホームズ浮世絵事件簿」「相撲事件簿」など名作が生まれていたかもしれません。

この件については調査中で、詳細はバルトン忌でお知らせする予定です。

日本スコットランド協会の稲永さんは、七月初めから仕事でスコットランドを訪問中ですが、バルトン先生の母方のイネス家子孫と思われる女性と会う約束をなさっていてバルトン忌で最新情報を伝えて下さることになっています。

「横綱大砲とバルトン先生」など、見たことのない写真も公開されます。

バルトン先生没後百年記念バルトン忌

- * 墓碑に花を捧げ、曾孫の鳥海幸子さんと一緒にスコットランド民謡を合唱する墓参
 - * 百年以上も昔の日本、台湾、スコットランドをめぐるできごとを思いを馳せる講演会
 - * 百年後の今こそ重要な、上下水道の原点をたどるパネル・ディスカッション
- ご参加をお待ちしています。

蓼喰虫a

し尿研究会報告

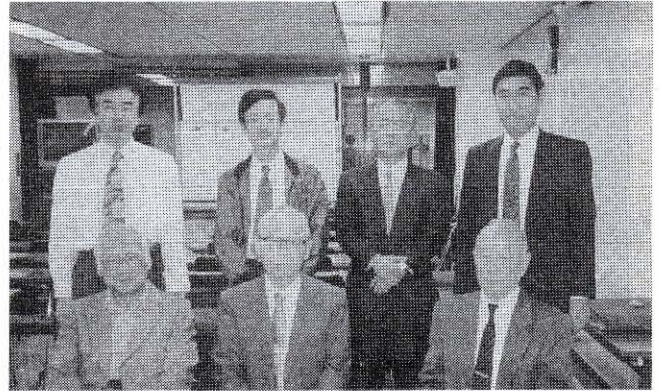
4月16日、東京ボランティアセンターで、東京都清掃局OBの鈴木和雄さんに、「綾瀬清掃し尿処理作業所」の話をして頂きました。綾瀬作業所は清掃局の歴史の中にもほとんどはっきり現れていないが、し尿処理の歴史にとって重要で謎の多い施設である。

昭和8年から稼働し、いつ終わったのかはっきりとしないが、戦中か、戦後すぐまで、東京都内では後にも先にも唯一のし尿処理場であった。現在の小菅下水処理場の場所

にあり、この時代にすでにし尿を希釈してではあるが、活性汚泥法で処理をしていた。

閉鎖後ここに清掃研究所を作り、昭和30年代に初代メンバーとして鈴木さんは配属されました。当時、綾瀬作業所は、稼働していませんが、施設はそのまま残っており、同じ敷地内で、直営の「し尿おけ」を作る作業所があったという。

古い写真で、鈴木さんがいた当時の綾瀬作業所の様子



の解説と全容を説明し、処理内容、BODという指標がない時代の設計値からその後のBODを計算して、処理内容の再現を数値で示していただきました。

なお、今回は、鈴木清志さんの「世界のトイレ その3」を9月3日(金)に日本下水文化研究会の事務所で行う予定です。

記 石井明男

お知らせ

今年の'99バルトン忌は盛り沢山

バルトンが明治32年8月5日に東京で亡くなられてから今年が丁度百年目に当たります。今年の8月5日は特別企画として、墓参の後にシンポジウムを開催いたします。墓参から参加なされる方は、13時に島村花店前に集まってください。シンポジウム(資料代1000円)から参加の方はAAビルB1「コンフォート」に14時に参集してください。

シンポジウムにはすでに別刷りでお知らせいたしましたように、多彩なお客様、パネラーなどをお呼びしております。みなさまお誘い併せてご参加ください。なお、シンポジウムの後に懇親会(会費2000円)を行います。その時にバルトンに関する新しい情報があるかも知れません。

功労賞等の受賞

日本下水道協会の平成11年度表彰で、6月30日に当会会員木村淳弘、堤武氏が功労賞、谷口尚弘氏が功績賞を受賞された。

栗田さん本を出版

当会会員の栗田彰氏が、前回の「江戸の下水道」に引き続き「青蛙房」より『江戸の川歩き』を発売いたしました。現在では見ることのできない江戸の川であったところなどをイラストマップ付きで浮かび上がらせております。青蛙房営業部(FAX03-3813-1599)に直接ご注文の方は、栗田彰の紹介であることを伝えると著者割引(定価の2割+送料310円)で購入できるそうです。

定価1900円(税別)

至急:研究発表会論文募集

第5回下水文化研究発表会の申し込み期限が過ぎました。もしも申し込み間に合わなかったがぜひ出演したいという方がおりましたら、早急にFAXでお申し込みください。まだ間に合います。論文の締め切りも9月10日頃まで延期する予定です。

前にもお伝えしていますが、研究発表会は11月12日です。直前になりましたら改めて通知いたします。また、次の日13日は、下水文化を見る会を予定しており、現在担当が興味ある企画を練っているようですのでお楽しみにして下さい。

11年度分会費請求をしています

11年度分の会費について現在請求をしています。今年度は、NPO法人の資格を得るため申請を行っているところですが、会計を今までより厳しく行わなければなりません。特に、過去3年以上にわたって未納の方は会員の資格を失うこととなりますのでご注意ください。

ミツカンが水の文化センターを開設

お酢で有名なミツカンが水の文化センターを1月26日に開設した。同時に機関紙「水の文化」(年3回発行)、ホームページの開設(<http://www.mizu.gr.jp>)等で水に関する情報を流している。

問い合わせ先 ミツカン水文化センター東京事務所

TEL 03(5762)0244へ

弁天様と水を訪ねて (一)

京都・吉水大弁財天女

「弁天様と水」の共同研究者である鈴木直子さんが京都を一人で旅をされ、円山公園近くにある「吉水大弁財天女」を訪ねて来た話をしてくれました。

「吉水」というのは安養寺の鎮守であった弁財天社境内に湧く名水だそうです。また、安養寺近辺の通称地名にもなっているというところで。

鈴木さんが調べられた「京洛名水めぐり」という本によりますと、「吉水」は早のときに祈ると必ず効験があると信じられていたそうであり、江戸時代には祇園の白朮詣りへお出かけた人からは、少し足を伸ばしてこの弁天様へお詣りして元旦の若水用に「吉水」を汲んで帰ったそうです。

『都名所図会』の安養寺の項に「吉水の井は鎮守弁才天の傍にあり。青蓮院宮御代々法親王灌頂の時、この水を闕伽とし、夜深更に例式の列を糺し来臨し給ひ、御手づから汲ませらるゝといふ。当山坊中の書院は昇らずして高樓に至り、清奇典麗いはん方なし」と記されています。青蓮院は粟田御所ともいわれる天台宗のお寺さんで安養寺の北側に現存して



▲吉水弁天

います。灌頂というのは仏教上の儀式で受戒ですとか結縁のときに香水を頭に注ぐことをいうようです。闕伽というのは仏様にお供えする水のことだそうです。挿絵には安養寺の門を入から、いくつかの石段の上に「弁天」と「吉水」が描かれています。境内にはいくつかの子院も描かれています。子院では席を貸して酒肴も出したそうで、遊興する人々の姿も描かれています。子院の一つであったのがいまの料亭「左阿弥」だそうです。

本文に「当山坊中の書院は昇らずして高樓に至り、清奇典麗いはん方なし」とありますように、鈴木さんも「平地から少し上ったところにありますから、京都の街がよく見える所です」と言

います。そして「白川沿い(京阪四條駅北側)の桜は夕暮れから夜にかけてがきれいでした。近くに町の人たちが祀っているらしい弁天様がありました

が、由縁などを記したものは何もありません。その直ぐ北側が弁財天町で、少し離れた所には上弁天町・下弁天町があるのです。狭い範囲の中に弁天の付く町名が三つもあるのびつくりしました」ということでした。

これを書きながら、京都の弁天様ならきつと美形だろうなあと思ったとき、肝心の弁天像のことを鈴木さんから聞くのを忘れていました。

栗田 彰

ついに事務所開設

当会では、NPO法の申請に伴い事務所を設ける必要性に迫られ、この度開設することになりました。場所は四谷から新宿に向かう靖国通りの成女学園高から右に少しはいったところす。

住所 〒162-0067 新宿区富久町6-5
NJS富久ビル別館3F

電話&FAX 03(5363)1129

常時人がいる訳ではありませんので、お問い合わせについては、FAXまたは郵便でお願いいたします。

最寄り駅

都営新宿線 曙橋駅 A2出口より徒歩8分
営団丸の内線 四谷三丁目駅 徒歩12分
営団丸の内線 新宿御苑駅 徒歩12分

編集後記

今回は申し訳ないのですが、合併号になってしまいました。今度は、事務所ができたので集まって編集することも可能になり私としてはホッとしているところで。(建)